

特集  
NAM戦兵士のタキシード  
ジャングルファティーグ  
Jungle Fatigue

Cover Photo  
U.S. Army  
© WORLD PHOTO PRESS 2020  
※本文中の価格は消費税込みの総額表示です。

CONTENTS



004 第22回 **サイゴン物語**  
Saigon Memories  
メコンデルタの水上マーケット  
on Can Tho River

008 **THE FIRST FIGHT**  
OPERATION STARLITE  
スターライト作戦

028 **WORLD of TANKS**で遊ぶべし!  
Part 2  
戦車を駆け抜けた戦車達 ●菊月俊之  
どうせやるなら個性派タンクでLET'S BATTLE! ●斎藤直樹

032 **WESTERN ARMS** 男の香りが漂う注目モデルが登場!  
コルトM1911 ゲッタウェイ ヴィンテージ  
エディション & ムービーガンシリーズ  
●Photos & Text by SHOTGUN MARCY

040 **SHARK SHOOTER LIVE-FIRE REPORT!**  
CZカスタム・ファクトリー 訪問記 前編  
●by Muneki Samejima

046 東京マルイ新製品リポート ●by Takeo Ishii  
**FNX-45 Tactical Black 実射リポート**  
続報! 固定スライドガスガン  
「LCP」&「MgP BODYGUARD 380」  
【特別企画】デカ島村が抜いて撃つ!  
ジャケット・ドロウ・テクニク

055 **現用米軍装備カタログ**  
The Equipments of the U.S. Force  
'90年代特殊部隊装備特集  
1993年 ブラックホーク・ダウン  
陸軍特殊部隊装備特集Part 3

064 **トイガンニュース**  
●WA コルトM1911A1コンパクト ヒートカスタム  
●タナカ デザートイーグル.50AE

068 **ニッポンのちからこぶ** ●写真と文/菊池雅之  
自衛隊次世代ファイヤーアームズ  
20式5.56mm小銃&  
9mmけん銃SFP9M

073 **THE グリーンベレー**  
**GREEN BERET**  
10th SPECIAL FORCE  
GROUP AIRBORNE ●文と写真/DJちゅう

080 **Militaria Roundup!**  
知られざるUSAAF/USAFユニフォーム

086 **シン・サバゲ三等兵**  
プラモで乗り切った自肅中報告&  
明けたぜ自肅、サバゲでmeets!

090 **Walther P38** PART2 ●by Ken Nozawa  
シリーズ 懐かしの名銃

096 **サバゲ三等兵APS部**  
おこもりガンズミス志願! マルゼンAPS-3  
自己流非公式メンテナンス紹介!

COMBAT FRONT LINE

- 016 時事特別コラム ブルーインパルス、東京の空を飛ぶ by 菊池雅之
- 017 COMBAT Recommend Movie by 狩野健一郎
- 098 コラム ベトナムを遠く離れて——。文/小倉 徹
- 100 ツゲチヨリ☆ シューティング武者修行への道
- 101 レアミリタリーテクノロジー
- 102 ミリタリーセレクトショップ 坂地組
- 103 ゲームOTT『THE LAST OF US PART II』
- 109 PRESENT & CIC
- 110 バックナンバー
- 111 奥付&次号予告



Photo/KOKU-FAN

**ミリタリースポッター**  
**2020年5月29日、東京が上を向いた日。**  
**その日、航空自衛隊の曲技飛行チーム**  
**「ブルーインパルス」が東京都心上空を飛行した。**

目的は新型コロナウイルスに対応する医療従事者と関係者に敬意を示し感謝するためだった。つまり前回のこの頁に登場した「アメリカストロング」のために編隊航過したブルーエンジェルズと同じである。ちがっていたのは、米海軍では前もってブルーエンジェルズが飛行する場所と時間を公表して、ポスターまで製作していたのに対して、日本ではギリギリまで情報は表に出なかった。飛行を見るために、人が集まって3密を生じてはならないからだという。何はともあれ、その日、東京は上を向いたのは確かだ。

Photo/Teruo Arai





特集

# NAM戦兵士のタキシード ジャングル ファティーグ Jungle Fatigue

ベトナムの戦闘服として大成功を収めたトロピカルコンバットユニフォーム、通称ジャングルファティーグはデジタル迷彩全盛の今日でもミリタリーはもちろんファッションの世界でも大人気を博している。凝ったデザインの初期型から機能性抜群のリップストップ仕様までディテールの変化についてもよく知られた感のあるジャングルファティーグだが、今回はめったにお目にかかれないジャケットのバリエーションモデルとベトナムで実際に着用された後期型ジャケットのいくつかをご紹介します。50年前の熱気を誌面から感じ取ってほしい。

構成/コンバットマガジン編集部 文/鈴木健太郎 協力/Komon(MMC)



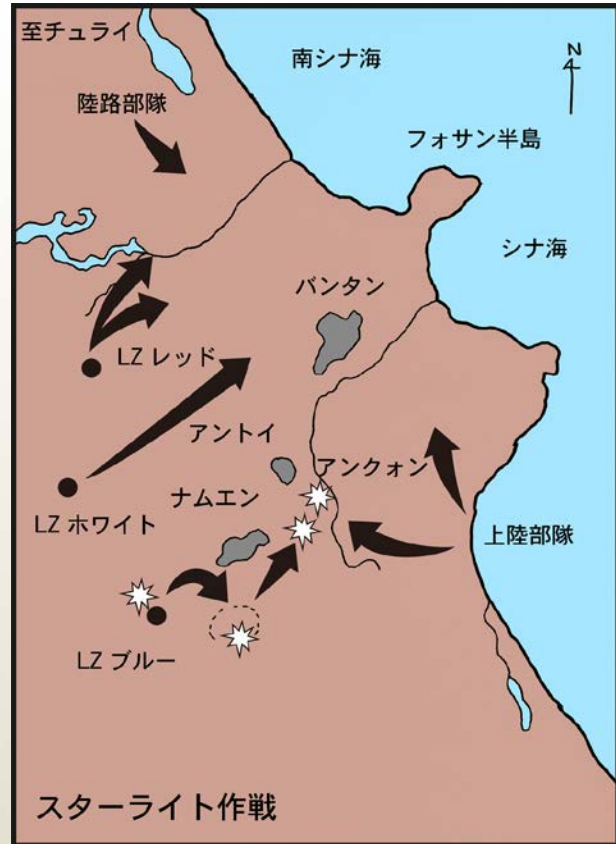


# THE FIRST FIGHT

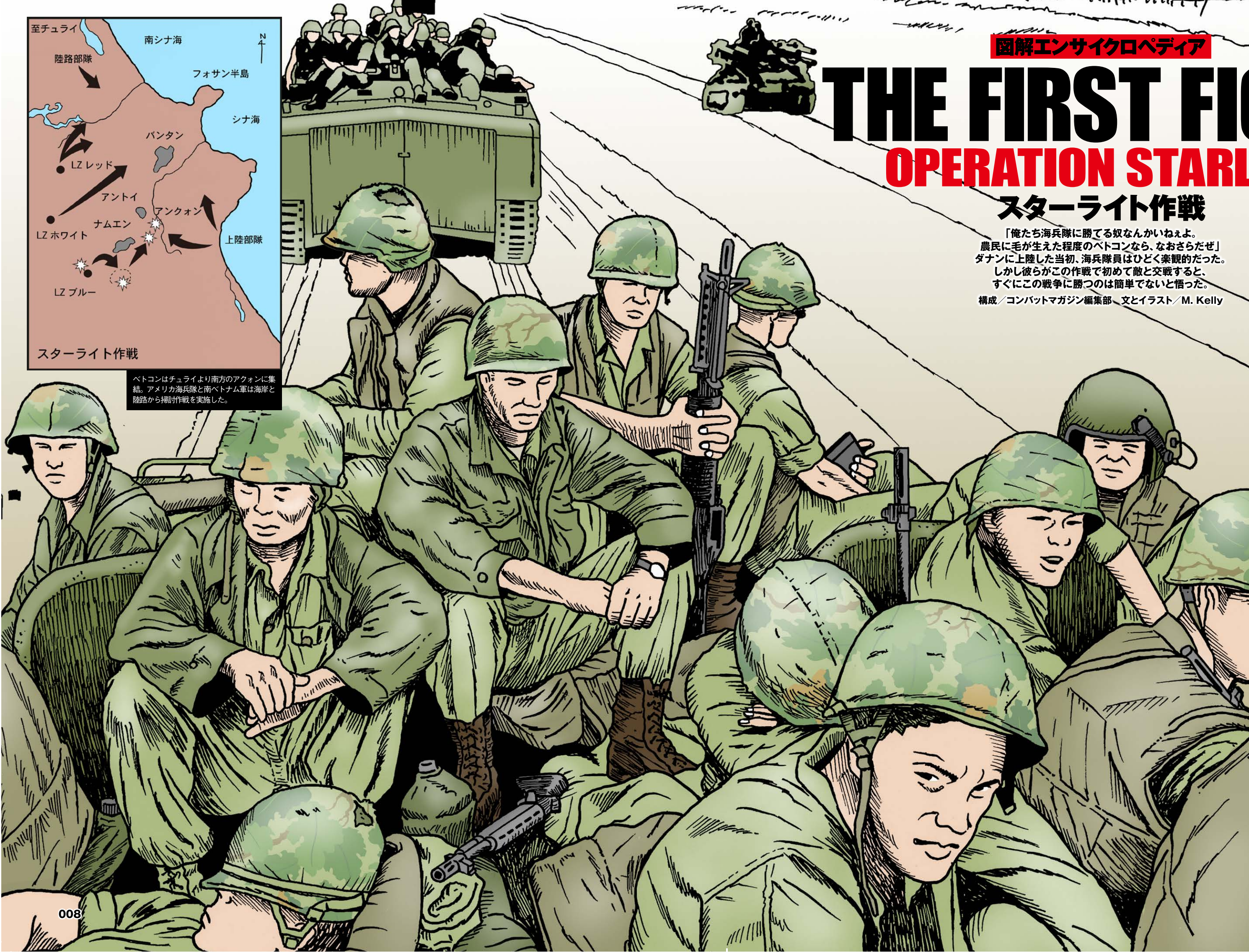
## OPERATION STARLITE

### スターライト作戦

「俺たち海兵隊に勝てる奴なんかいねえよ。農民に毛が生えた程度のベトコンなら、なおさらだぜ」  
ダナンに上陸した当初、海兵隊員はひどく楽観的だった。しかし彼らがこの作戦で初めて敵と交戦すると、すぐにこの戦争に勝つのは簡単でないと思った。  
構成/コンバットマガジン編集部、文とイラスト/M. Kelly



ベトコンはチュライより南方のアンクオンに集結。アメリカ海兵隊と南ベトナム軍は海岸と陸路から掃討作戦を実施した。



1965年3月、アメリカ合衆国、第3海兵遠征軍がダナンに上陸した。その後、ダナン飛行場周辺12km四方を南ベトナム軍と防衛任務にあたった。ベトコンの行動が目を追うごとに活発さを増すとウエスト・モラント将軍は、より攻撃的な「索敵と撃滅」パトロールの活動を提案。6月に敵の破壊工作部隊の攻撃を受けたことにより、スターライト作戦が本格的に動きだした。7月の初めには、チュライから南へ32kmにあるバギアの南ベトナム軍の駐屯地が攻撃され130名の犠牲者と200近い武器や大砲を失った。7月30日に、ウエスト・モラント将軍は海兵隊のウォルト将軍に、南ベトナム軍と共同で行なうことを伝えた。バギアを攻撃したのはベトコン第1連隊だった。この連隊の動きを察知したアメリカ軍は、8月6～7日にコードネーム「サンダーボルト」による索敵と撃滅作戦を実施。内容は国道1号線の西側の川の南7kmにまでおよぶ地域を索敵することだった。作戦に参加したのはアメリカ第4海兵連隊と南ベトナム軍第1師団第51連隊。しかし、この大規模な作戦では、ベトコンの動きをほとんど探ることができずに、散在する弱い抵抗勢力に遭遇しただけだった。「サンダーボルト」から8日後の8月15日、ついに、連合軍は南ベトナム軍に投降したベトコン脱走兵からの情報によってベトコン第1連隊を捕縛。それによると第1連隊はバンチュオンにあり、その戦力は第60大隊と第80大隊の2個大隊に補強の2個中隊を加えた総勢1,500人であるとのことだった。南ベトナム軍第1軍管区司令官のグエン・チャン・チ将軍は、この情報は信頼できると判断し、ウォルト将軍に報告。すると、ほとんど同時期にアメリカ海兵隊の情報部でもこれらの情報を確認していたことが分かった。第3遠征軍で緊急の作戦会議が開か





東京マルイ

東京マルイ ☎03-3605-1113  
http://www.tokyo-marui.co.jp  
Photo & Text by Takeo Ishii  
撮影協力 / BATON Range  
https://www.batonrange.com

# GAS BLOWBACK FNX-45 Tactical Black

「21世紀のSOCOMピストル」を目指して行なわれたJCPP (=Joint Combat Pistol Program) トライアルが生んだ理想の軍用ハンドガン! 映画『ザ・アウトロー』(2018)や、人気小説『極大射程』をドラマ化した『ザ・シューター / ファイナル・シーズン』(2018)といった映像作品でも鮮烈な印象を残した「黒いFNX-45タクティカル」。東京マルイからいよいよ登場するガスブローバックを今回は思いっきり実射!

砂漠の戦場にマッチするFDE (フラットダークアース) も現代ミリタリー風でもちろんカッコ良いのだが、さまざまな装備 & シチュエーションに合わせ易く都会的な雰囲気ブラックも欲しい! というユーザーからの要望の声は常に高かったのだという。デニムの上下にチェストリグと難燃性グローブのみ、という「特殊部隊の軽装スタイル」にも違和感なく馴染む。

FNX-45タクティカルは、ハンドガンとしてはかなり大型の部類だ。デザートイーグルやMK23ソーコムピストルあたりの「超大型」ではないにせよ、M1911やハイキャパといった「大型」より一回り大柄な印象だ。

とはいえフレームが樹脂製なので実銃でも見た目よりは軽い印象なのが特徴だ。そしてマルイのFNX-45は銃本体だけだと実銃に近い重量になっており、程よいズッシリ感を楽しむ事ができる。

対して、この手の銃が活躍する現場で大きな問題となるのがサブレッサーや各種のライティングモジュール、エイミングデバイス等のアクセサリーを装着した際の重量増加だ。実銃ではいかんともし難く、未だに世界各国の装備メーカーが創意工夫を凝らしている課題を、東京マルイはホビーマイカーらしく大胆に割り切った手法でこれを解決している。

もっとも顕著なのは樹脂製のフロント & リアサイトだが、スリーダットには暗闇で光る蓄光材がしっかりと仕込まれ、ガスブローバックとしての作動性と実

## クラス最大級ボディながら、フルオプションで1kg未満の軽快さ!

用性を見事に両立させている。

また、東京マルイ純正のタクティカルサブレッサー (59g)、マイクロプロサイト (16g)、更にCQフラッシュ (48g) を装着したオプションフル装備の状態でも総重量は953gという軽快さ! 銃本体だけの状態から僅か「+123g増」であり、これならサバイバルゲームでプレイヤーがもっとも重視する機動性もバッチリ確保され、疲れを覚えずに戦いに集中できるだろう。

セフティ、スライドリリース、マグキャッチといったすべての操作系パーツが左右両側から操作できたり、グリップのバックストラップ交換によって握り心地やサイズの微調整を図れたりするのも「21世紀の現代戦闘拳銃」に相応しい理想的な仕様だ。



**GAS BLOW BACK FNX-45 Tactical Black 19,580円**  
●全長:220mm ●インナーバレル長:113mm ●重量:830g  
●装弾数:29+1発 ●パワーソース:HFC134aガス、ノンフロンガンパワー  
●作動方式:ガスブローバックセミオート  
●タクティカルサイレンサー(ブラック) 4,180円  
●FNX-45タクティカル用スベアマガジン(ブラック) 3,278円  
●マイクロプロサイト(ブラック) 7,480円



マイクロプロサイト装着を当初から想定した設計+デザインなので一番カッコ良い位置 & 高さにマウントできるのがサイコー! 着脱もネジ2本だけなので簡単だよ!



可変HOP-UPの調整はスライドを外して行なう。サイレンサーを付けていても力強く滑らかに作動する秘密はアウターバレルとインナーバレルブロックの嵌合構造にアリ!

BATON Rangeが誇る30mレンジで実射! ヘアリングバイオ0.25gBB弾で30m先の「30cm鉄板ヘッド(命中して中心部LEDが光っている)」ならほぼ100%命中! サイレンサー付きでも安定したHOP弾道が気持ちいい〜!

実銃では.45ACP弾×15発が収まるドデカイマガジン。ステール板外装と見紛うばかりの造形と仕上げが見事だ。底部の大型バンパーも使いやすい。



# COMPACT CARRY GAS GUN LCP

Model:Deca Shimamura(Tokyo Marui)

徹底的な合理化による小型軽量化をきわめた結果ホールドオープン機構までもが省略された.380口径護身用小型拳銃、ルガー-LCP (ライトウェイト・コンパクト・ピストル)。昨今アメリカでのCCW (=コンシューム・キャリア・ウェポン) ブーム再燃の火付け役、と言われるこの銃を、東京マルイは実射性能に優れたシンプルな固定スライドガスガンとして発売する。実銃同様ダブルアクション・オンリーの発射メカニズム。

## CCWブームの火付け役となった 小型セルフディフェンス拳銃!

短いながら精密な真鍮インナーバレルを搭載。高性能HOP-UPによる「20m以上フラットに飛び」弾道を目指すという。従来の低価格商品とは一線を画した「実銃を彷彿とさせる重量感・リアル感」にも注目が集まる。

日本のエアソフトファンにとって「小さめ拳銃」代表のG26 (奥/筆者私物)との比較。いやあLCP、小さい! 薄い! 実銃の最大幅は僅か「21mm」。フロント&リアサイトもじつにシンプル。

- COMPACT CARRY GAS GUN LCP**
- 全長:131mm ●全幅:21mm (\*\*実銃の場合)
  - 銃身長:67mm ●重量:255g
  - パワーソース:フロン134aガス、ノンフロンガスパワー
  - 作動方式:固定スライドガスガン、ダブルアクション、固定HOP-UP搭載
  - 装弾数:10発 ●価格:7,000円程度の予定



# COMPACT CARRY GAS GUN BODYGUARD 380

## 洗練されたフォルムがカッコ良い 21世紀版S&Wボディガード!

「S&Wボディガード」といえば昔は.38口径5連発のJフレームリボルバーだった。21世紀のボディガードは薄型の.380オートマチックとなり、実銃では装弾数も「6+1発」と2発増え戦闘力大幅UP! この銃もまたアメリカでは護身用に大人気ようだ。東京マルイはLCP同様、ダブルアクションで連射できるHOP-UP搭載の18歳以上用・固定スライドガスガンとしてモデルアップ。しかもフォルムはボリューム感のある「CTレーザーモジュール搭載版」で、シンプル筋のLCPとも好対照を成す。マガジンボディおよび内部機構の多くがシリーズ共用。今後のバリエーション展開にも期待大!

- COMPACT CARRY GAS GUN BODYGUARD 380**
- 全長:133mm ●全幅:19mm (\*\*実銃の場合) ●銃身長:67mm
  - 重量:265g ●パワーソース:フロン134aガス、ノンフロンガスパワー
  - 作動方式:固定スライドガスガン、ダブルアクション、固定HOP-UP搭載
  - 装弾数:10発 ●価格:7,000円程度の予定

実銃同様のダブテイル(アリ溝)固定にしか見えないフロント&リアサイトや今にもショートリコイルで沈み込みそうなチェンバー部など、金型モールド(彫刻)による造形表現が超リアル!

LCPとBG380ではベースプレート形状に違いがあっても互換性はないが、マガジンボディはこのシリーズ共用の同規格品だ。装弾数は10発。

Model:Deca Shimamura(Tokyo Marui)





# CZカスタム・ファクトリー

## 訪問記 前編



競技界でCZ系を使い、数々の栄冠を獲得したトップシューター、アングス・ホプデル氏。彼が代表を務めるCZカスタム・ファクトリーから生み出されるモデルの数々が、今、注目を集めている。そのモデルの実力を探るべく、シャークシューターこと鮫島宗貴氏がファクトリーに潜入取材。今月から2号にわたって、その模様をお伝えします！

CZカスタムのプロデュースする銃がこちらのA01シリーズ。アングス氏の経験と理想が詰まったCZカスタム・ショップの自信作だ。上のモデルは、A01-LDオプティック・レディ、下は、A01-Cレイルとなる。どちらもカスタム・トリガー仕様となり、スムーズなダブル・アクションと切れ味鋭いシングル・アクションを実現している。重たいフレームによりリコイルが制限され、その撃ち味はポリマー・フレームの銃とは一線を画す。マズルはほとんど跳ね上がらない。



CZカスタムのプレジデント（代表）を務める、アングス・ホプデル氏。イングランドからの移民であり、銃器業界でのコンペティション・シューターとしての実績で永住権を取得し、アメリカに移住してきた真の実力者。正にアメリカン・ドリームを手中に収めた成功者だ。IPSCを初めにアクション・シューティングの草創期から活躍し、そこで得た経験と知識をCZカスタムの製品プロデュースに生かしている。当初は、彼1人で始めたCZカスタムも今や20人近い社員を抱える会社へと成長した。

### CZカスタムとは？

CZカスタムは、アリゾナ州はメサに拠点を構えるカスタム・ショップ／ファクトリーだ。その名の通り、CZ系カスタムを中心としており、近年はオリジナルパーツを初め、ついには、オリジナル・デザインの銃本体であるCZ A01シリーズの生産も行なっている。CZカスタムの代表を務めるのは、僕も度々お世話になっているトップ・シューターの1人、アングス・ホプデル氏だ。彼は、競技界でCZ系を使い始めた第一人者であり、試合という実践を通してCZ系の銃を発展させてきた。CZカスタムは、イメージ的には、1911系のウィルソンやナイトホークと同じような

感じだ。CZシリーズの実用的な高級カスタムを行なうファクトリーと考えて良いだろう。また、ガンショップでもあるので、CZ以外の銃でトラブルがあったとしても修理やカスタムの相談にものってくれる。今月は、そんな最新CZカスタム・シリーズが生み出される現場の様子をお伝えしたい。

### アメリカン・ドリームを実現したトップ・シューター

CZカスタムの代表を務めるアングス・ホプデル氏について、まずはご紹介しておこう。僕が彼の名前を専門誌で目にしたのは、いつのことだっただろうか…。ロブ・リーサム、ダグ・ケーニグ、タッド・ジャレ

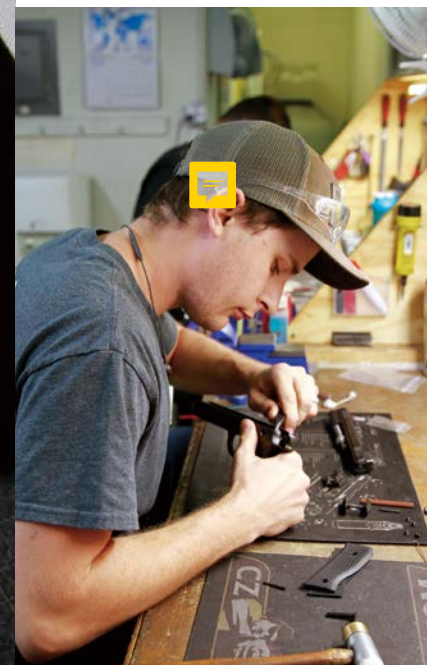
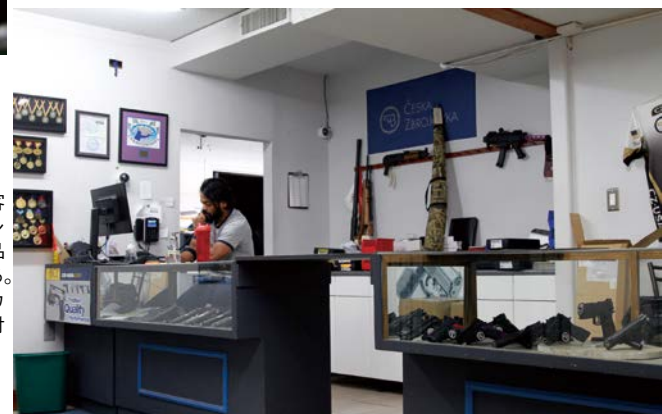
ットらと共に活躍してきた有名シューターとして認識しており、彼が愛用する銃がCZ系というのも印象に残っていた。IPSC/USPSAを初めにスティールチャレンジでも上位に度々名前を連ねており、常に注目を浴びてきたトップ・シューターだ。

アングス氏は、移民でありアメリカ生まれではない。もともとは、イギリスはロンドン出身だ。意外にも父親が銃嫌いの家庭で育ったそうだ。

ティーンエージャーの頃から銃器と射撃に興味を持ったものの、当時のイギリスで、銃を手にする為には、射撃クラブに入会してから銃器の所有申請をしなければならなかった。申請書にはクラブからの推薦が必要で、それを得る為に数ヶ月の在籍期間を要求されたそう。クラブに通い詰めて、晴れてセンターファイヤの銃の所持が認められてからは、中古のリローディング・マシンも入手し、

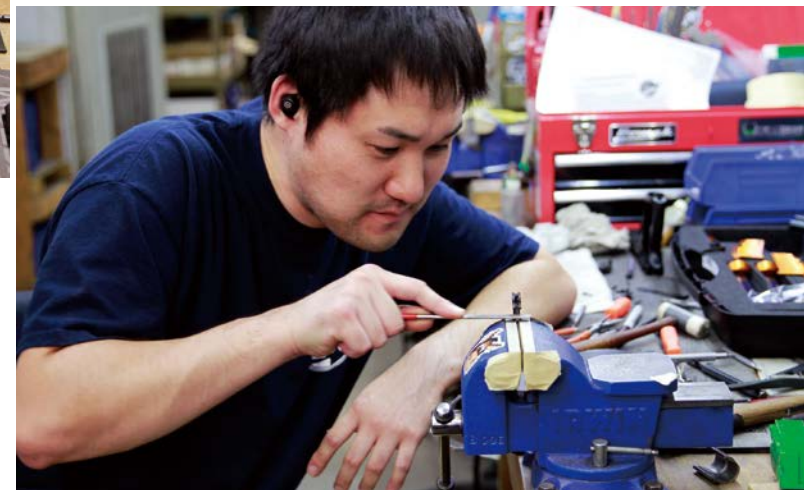


CZカスタムのショールームの一角には、アングス氏のコンペティション・シューティングでの活躍を物語るトロフィーやメダルの数々が飾られている。



ガンスミスは各自が決まった作業を担当。こちらでは、A01シリーズのスライドとフレームのフィッティングを行なっている。

こちらはフレームに対してマグウェル加工を行なっている所。CZカスタムで働くガンスミスは、心底銃が大好きな人たちばかり。



スライドとフレームのフィッティング。表面処理が終わったA01シリーズの最終組み立てを行なう若手ガンスミス。A01シリーズの生産が始まってガンスミスの数は更に増えている。

CZカスタムで働くガンスミスには日本人が混じっている。もともとは日本で普通に働いていたユキ君だが、小さい頃から銃が大好きでガンスミスになる夢を持っていた。留学中に物は試しと抽選で配分されるアメリカ永住権に応募してナント当選。夢を実現する為にアリゾナ州へと移住。そこで、筆者にコンタクトしてきたのがきっかけに彼と知り合うこととなった。ユキ君の熱意と人間性を信用した僕は、彼にここでの仕事を紹介。今では、CZカスタム・チームの一員として、立派に仕事をこなしている。



# Walther P38 PART2

KEN NOZAWA氏をガンマニア道にいざなった名銃ワルサーP38。  
先月に続きその魅力を余すところなくお伝えします！

Report by By Ken Nozawa



## ガンマニアへの道を創った銃 それがワルサーP38だった

今、好きなガンを好きに撃てるとしたら、どのガンを選ぶのか？

そんな問い掛けを、ガン好きたちは往々に空想する。

アッチの命中率がいいとか、コッチのパワーは凄いとかが、ガンの魅力を並べ上げ、列挙し、No.1の一挺を決定しようと苦勞する。が、多くの場合、簡単にはNo.1は、“唯一”の一挺は決まらない。好きなガンが多すぎるのだ。

それは私も同じで、どれか一挺だけと言われると困る。激しく困る。ア

レもコレも好きなので、とてもじゃないが絞り込めない。が、それでも、好きなガンを、撃ちたいガンを一挺だけ選べと迫られれば、ワルサーP38を指名するのだ。

もちろん、そう言い切るには理由がある。

私がガンに興味を持ったのは10歳のときだ。それは50年前、半世紀前になる。あるとき6歳年上の兄が、モデルガンのワルサーP38をいきなり、見せびらかしてきた。

「どうだ〜！ すげーだろっ!!」

と言いながら、黒くて重いモデルガンのワルサーP38を見せびらかした

のだ。当時はモデルガンといえはすべてが金属製で、まだ銃刀法の改正（昭和46年）も行なわれる以前のことで、外觀の仕上げも黒く、見るからに異世界感を漂わせる存在だった。

それは中田製のワルサーP38で、銃刀法の改正後にマルシン工業が販売を引き継ぐことになったモデルだと後に知ったが、10歳だった子供の私には“ホンモノ”に見えた。まあ“ホンモノ”を見たことはなかったけど、迫力というか、ルックスというか、近寄ると匂いが“ホンモノ”だったのだ。「うわーっ！ それ、ホンモノ？ ホンモノ？」

と、叫んだね。まあ、小学生だったから。玩具とホンモノの区別なんてないから。

「これはモデルガンって言って、ホンモノに似せたオモチャで…」

とか何とか、6歳年上の兄は話してくれたと、オボロげに思い出されるのだけど、その当時は“ホンモノ”という言葉しか頭に入らず、ということでは外国のどこかから持ってきたことで、もしかしたら刑事ドラマで言ってた“ミツコ”っていうヤバイ世界のもので、なんだか分からないがスゴイっ!! と決め付け、一人でコーフンして両目を真っ赤に充血

させながら、兄の右手のワルサーP38に視線を注いだのだ。

そんな私の異常事態を知ってか知らずか、兄は、ワルサーP38のスライドを左手で握ると、ゆっくりと引いた。「カチャッ！」

と、金属と金属とが擦れるというか、ぶつかるといふか、はたまた何かのスイッチを入れたと宣言するような硬質な音が耳に飛び込んだ。「うおーっ！ スゲーッ!!」

何がどうスゴイのか。どこにスゴイと感じたのかは今は思い出すこともできないのだけど、ゆっくりとスライドを引くと、連動してパレ

ルも静かに後退し、そのメカメカしいパーツの構成が顎（あらか）になっていくという流れに、ただただ感動したのだ。

そして、続けて、スライドをゆっくり前進させ、マガジン最上段のカートリッジを滑らせるように押し出すと、スライドの前進に合わせてチェーンバー内へと送り込ませた。その一連の流れは、その後もスローモーションとなって私の脳内で何度も美しく再生され、どういった仕組みなのかは知らないが、恐ろしく高度な加工技術と英知によって完成した仕組みに違いないと私を納得させ、身震

いさえも起こさせたのだった。

まあ、子供だった私は、そんな難しい言葉での表現など浮かぶはずもなく、ただただ、スゲーっ！ スゲーっ！ を連発していただいただけだ。「ほら。もってみるよ」

と、兄は、ワルサーP38を手渡してくれた。

「うん。うん」

と、首を縦に振りながら、生まれて初めて握ったワルサーP38は見た目の十倍は重く、どう見ても“ホンモノ”で、鼻に近づけると明らかに犯罪の匂いがした（ような気さえする）。

「ホンモノはすごいね〜！ ホンモノは重いね〜！」

と、すっかりホンモノ判定だ。

しかも、そのワルサーP38は、紙火薬（当時はキャップ火薬はなかった）をカートリッジの頭の穴に詰めることで、発火と轟音を楽しめるという仕掛けがあり、実際に発火させると、無機質なガンに命が宿ったとしか思えない熱さが伝わり、ますますシビレたね。そう。「轟音」という言葉だけど、モデルガンカタログを見ていて小学生のときに覚えたのだ。

言ってしまうと、ワルサーP38は、私をガンマニアの世界に誘（いざな）ってくれた記念すべき一挺で、同時